



第139号

2023年10月15日発行

千葉大学教育学部  
同窓会

〒263-8522

千葉市稲毛区弥生町1-33



### 千葉大学教育学部長に就任して

教育学部長 藤川大祐

今年度から教育学部長に就任した藤川大祐と申します。東京生まれの東京育ち、一九六五年生まれの五十八歳です。

私が千葉大学に着任したのは、ちょうど二十一世紀が始まった二〇〇一年度でした。この頃、千葉大学大学院教育学研究科では、現職の教員の方々が学びやすい夜間対応の大学院の拡充を進めており、一九九九年度に開設された学校教育臨床専攻に続いて、二〇〇一年度からはカリキュラム開発専攻が開設されることとなっていました。私は、教育学部の教職関係の授業に加えて、大学院カリキュラム開発専攻で、実践的な授業づくりに関する指導を担当する教員として採用されました。

私は学生時代から、「授業づくり」をテーマに研究をしてきました。大学院博士課程の頃は、中学・高校で数学の非常勤講師をして、ひたすらオリジナル教材を準備して授業をしながら、討論・話し合いの授業の研究や環境教育の教材開発などを行っていました。その後、採用された名古屋にある金城学院大学の現代文化学部情報教育学科では、メディアリテラシー教育やディベート教育などの授業づくりを進めていました。そのように教科・領域にこだわらずに授業づくりをしてきた私には、教科・領域の枠を越えて新たな授業づくりを扱う千葉大学のカリキュラム開発専攻は魅力的でした。

千葉大学に着任して以降は、教育学部の自由な雰囲気の中で、附属学校、地域、企業等と連携しながら、現職教員を含めた学生たちと、さまざまな取り組みをしてきました。二〇〇三年度に学生たちと作った「NPO法人企業教育研究会」は二十周年を迎え、多くの企業と連携して、学校に教材や授業プログラムを提供する活動を続けています。二〇一〇年度に千葉市と始めた「西千葉子ども起業塾」は、小中学生対象の起業家教育プログラムとして広く知られるようになり、現在、千葉市では起業家教育のコンソーシアムが作られるまでに至っています。二〇一一年度からは学生たちとともに附属中学校で選択教科の授業を担当させてもらうようになり、附属学校で授業をしながら研究するスタイルを続けてきました。こうした取り組みをしてこられたのも、千葉大学で自由に活動させていただけたからだ、感謝しています。

私は二〇一五年度から副学部長、二〇一八年度から附属中学校長を務めるなど、学部運営に長く関わらせていただいております。このたび小宮山前学部長から学部長を引き継がせていただきました。大学をめぐる状況は何かと厳しくなっていますが、長くお世話になってきた学部にも全力で貢献したいという思いでおります。特に、教職員がやりたいことを進めやすい状況をつくり、維持していきたいと考えております。同窓会会員の皆様にもお世話になることが多いと思いますが、よろしくお願いたします。

コロナ禍以降、さまざまな制約がありました。今年度になって制約がほぼ解除され、学生たちも少しずつ以前のような活動ができるようになっていきます。そうした学生たちを後押ししながら、学生たちが教員の仕事に関心をもてるように、そして教員として働くことへの不安がなくなるように、地域の教育委員会や学校と連携しながら、できることを進めていこうと考えています。

百五十年の歴史ある学部が、これからも新しい挑戦のできる学部であり続けられるように、皆様とともに歩んでいきたいと願っております。今後ともよろしくお願いたします。

### 紙面紹介

特別寄稿	6面
学校現場から	2面
学校現場へ	3面
会員のいきいきだより	4・5面
私の学園生活	7面
私の趣味アラカルト	8面
<b>新シリーズ</b>	
学舎の今	8面
読者の声から	9面
支部だより	9面
定期総会の概要	10面
功労者・永年勤続者表彰者の紹介	10面
受賞者からのメッセージ	11面
令和5年度の経常費予算	11面
事務局より	12面
物故会員	11面
編集後記	12面

特別寄稿



振り返りみすれば

長崎での三十年間と、それを支えるルーツ

長崎大学教育学部教授 鈴木慶子

(S60・3卒)

現在、長崎大学教育学部に勤務して二十九年目となります。あと三年間と今年度の残りを勤めれば、長崎大学を定年退職となります。

千葉県に生まれ、千葉県で育ち、千葉大学卒業。大学院修了までの学校教育のすべてを千葉県で受けた私が、たった一度だけ観光で行ったことがあった長崎を拠点として約三十年間を生きてきました。このことで、東京圏の出来事を俯瞰する視点を持てるようになりました。これが最大の収穫だったのだろうと振り返ります。その視点は、研究や人間観察にも波及しているように感じます。

根底には、千葉での学び、とりわけ千葉大学教育学部での学びがあります。

私の専門は、書字書写教育です。大人になれば、文字を手書きすることがないという方が非常に多い現在となりました。将来は、それがもっと加速していくことでしょう。したがって、この分野は消滅

するのでしょうか。夏休み前、卒論ゼミの学生(教員志望ではない)が、こんな話をしていました。

「高校時代の友達も言っていたけれど、就活でエントリーシートを手書きで求めてくるところは、将来性がないから、その時点で却下。官庁系が典型的だね。説明会でも紙媒体で三センチくらいの冊子資料を出してくるからね。国家一種の受験者数が減っているのは、勤務がブラックという以前に、エントリーシートを手書きで書かせるからだということにも、気がついたほうがいいんじゃない」と。

傍らで聞いていた私は、「そうかもしれないね。大人が手書きしないのは、世界的な潮流だから。でも、発達過程の、言語獲得期の子どもは、どうなのかしら」と口を挟みました。

手書きしない社会実験が進行しているような日本にあって、私の三十年間は、人間の知性への影響

に関して、何らかのエビデンスを得、それを基盤とした学的発言をしていくべきだと考えてきた気がします。

今夏、再びノルウェーに取材に行きます。ノルウェーでは、二〇〇六年秋から、就学後の文字学習を、ハンドライティングで先習するか、タイピングで先習するか、各小学校が選択してよく、家庭での教育も拘束しないという教育課程が実施されています。

それに関して、教室の指導者を巻き込み、児童への影響を調査する DegiHand プロジェクト(二〇一八―二〇二一)が起こっています。現在は、プロジェクトが終了して、すでにいくつかの研究報告が発表されていますが、今回の取材では、報告書を読むだけでは理解できない具体や背景をリアルに取材してることが目的です。

理想であるなら、ノルウェーでも、当該の教育課程を実施する以前に、DegiHand プロジェクトのような調査研究の成果を、吟味することができたらよかったです。是非とも、日本の場合は、そうあってほしいと願っています。人間が最も大切な資源であると

いう理念を体現している北欧は、多くの点で日本が参照すべき事例の宝庫です。しかしながら、それを鵜呑みにして日本に移植するのではなく、先行する事例として熟考しつつ、進むべきです。既存の教科枠にとらわれず、広く隣接する分野の方々と共同して、未来にすぎたいと考えています。

千葉大学教育学部は、同窓に拘らず、同志同志を見つけて進む志向を育ててくれたのです。とりわけ、直接の恩師である久米公先生(書写書道教育)、長崎大学へ着任について積極的に後押ししてくださった宇佐美寛先生(教育哲学)の存在は支えとなりました。



ノルウェー・スタヴァンゲル大学スタッフによる DegiHand プロジェクトの概要紹介 (2019. 8)

「絵」と「書」を楽しむ



土屋 正博 (S40・3卒 松戸市)

教職を終え、松戸で自由気ままに過ごしていたが、父が一人暮らしとなり、いすみの実家に戻った。家や庭の手入れ・畑仕事の暮らしは長閑だが、何か物足りなさを感じる。考えた末、細々と続けてきた「絵」と「書」について、気持ちを変えて取り組むこととした。

私の趣味



私の好きなこと



安部 健 (H2・3卒 印旛地方)

私の趣味はスポーツ観戦である。休日には多くの方がそうであるように、大谷翔平選手の活躍をテレビで観戦する。ホームランを打ったり、ナイスピッチングをしたりすると、気持ちが高まる。

間と一緒に描き、批評し合うことを通して、一層楽しめるようになった。「書」は講師の指導を受け、近代詩(楷書や行書と違った書体で表現するもの)に取り組んでいるが、字形・墨の濃淡・かすれを常に心掛けると、創作の難しさと併せて楽しさも増した気がする。



球場での観戦はまた格別で最高だ。ほかにはプロレス観戦もする。会場で生観戦すると、その迫力はすごい。鍛え上げられた体で、常人にはできない技の攻防を見ると、「明日も頑張るぞ!」という気持ちになり、勇気をもらえる。

新シリーズ

「ことば」を大切にする

教員を志して

教授 鈴木 宏子

国語科教室には現在、小学校コース国語科選修、中学校コース国語科教育分野をあわせて、およそ百五十人の学生が在籍しています。また大学院には、現職教員も含む十名の院生がいて、日々研究に励んでいます。教員は国語科教育担当二名、国文学担当二名、国語学担当一名、書写書道担当一名の計六名体制です。学生数の多い国語科ですが、学生同士、また学生と教員の間には、親密な人間関係があります。写真は二〇二三年六月に実施したFD研修会の様子で、学生・教員うち揃って仲良く書写の練習をしているところです。

学舎の今 国語科教室から

の味」が再現・継承されました。中学校コースは一年八名の少数精鋭です。小人数のよさを生かして、お互いの個性を尊重しつつ助け合い支え合って、よりよい学びを実現しています。教育学部一号館三階には国語科資料室があります。国語科の学習に必要な辞典類・教科書・叢書類がぎっしり並んでおり、演習の準備や教育実習の下調べのために、多くの学生がノートパソコンを開いて勉強しています。「千葉大学国語科教育の会」という同窓会組織もあり、年一回の大会は、各学校で活躍する卒業生と現役学生の交流の場ともなっています。国語科には、新しい時代にふさわしい「ことば」を大切にする教育を志す仲間が集っています。



# 読者の声から

## 記念誌を読んで



中村 登喜子

(S31・3修了  
長生地方)

令和四年に刊行された「師道」百五十周年同窓会記念誌を読み進めるうち、気になる記事を見つけた。それは、「教育学部で学んで」というタイトルの中のひとつ「追求することの楽しさ」というテーマだった。執筆者は、市原市の関谷聡先生だ。

実は、私の家の庭に、銚子砂岩と伝えられている岩がいくつかある。これは、義父が、庭に池を作るために集めたものだ。義父は、昭和二十二年、夫が十二歳の時に他界した。

関谷先生の研究した礫岩と目の前にある砂岩とを、銚子というところで結びつけてしまった私の早合点だったかもしれない。関谷先生は、私の電話先で、記事を読んでくれたことを喜んでくれた。

亡義父の残してくれたものは、築百年になろうとする家、広い庭

と樹木、どれも思い入れいっぱいのものである。それにしても、銚子から我が家までどのように運搬したのであろうか。トラック？牛車？貨車？……。何げなく見ている庭、樹木、井戸など改めて見て、そこにある意味が知りたいと思っ

た。義母の言葉、「日曜になると人が大勢来て大変だった」の訳が分かるかもしれない。思いがけない記事から、我が家の歴史をたどる機会になり、この出会いに感謝している。私は、今日も、日課の草取りに出るだろう。



# 船橋市支部

## 支部だより

# 鎌ヶ谷市支部

船橋市支部は、昭和三十五年、船橋小学校(創立百五十一年)に、事務局を置いてスタートした。爾来六十有余年、支部会員の熱き思いに支えられ、今日まで受け継がれていく。主な活動は、支部会報の発行(今年度第四十一号発行)、毎年の人事異動等に伴う会員名簿作成(現在会員約三百八十名)、四役会・役員会・総会及び懇親会の開催である。

しかしながら、コロナ禍のために、会合を開催できず、厳しい運営を余儀なくされた。

今秋、四年ぶりに総会及び懇親会を開催する予定である。本学会を会長、市教育長をお招きし、現役、OB会員が一堂に集い、和やかな雰囲気の中、近況報告や思い出話、学歌・寮歌、情報交換等が賑やかに行われるだろう。新卒の二十代から九十代の大先輩までが交流できる貴重な場となる。

こうした船橋市支部の良き伝統を大切に育ててこられた多くの先輩方に深く感謝すると共に、支部の新たな発展と良き伝統の継承のために、会員一同、心を合わせて、一層の努力を重ねていきたい。

(文責 寺田政則)

鎌ヶ谷市は県の北西部に位置し、果樹や野菜の栽培が盛んである。江戸幕府の軍馬を養成した「中野牧」にあった野間土手と捕込は、国史跡に指定されている。また、明治維新後の最初の開墾地「初富」がある。北海道日本ハムファイターズの二軍の本拠地兼練習施設があり、今年のWBCで活躍した大谷選手・ダルビッシュ選手はプロ入団時、鎌ヶ谷市民だった。ファイターズ鎌ヶ谷スタジアムは、小学校の市内見学のコースの一部にもなっている。



野間土手・鎌ヶ谷市提供

新鎌ヶ谷駅は、東部アーバンパークライン・新京成電鉄・北総鉄道・成田スカイアクセス線が交わり、最近では首都近郊の住宅都市として発展してきている。現在市内の学校は、市立小学校九校、市立中学校五校、県立高等学校二校である。鎌ヶ谷市支部は、支部として大きな活動はしていないが、長期研修生として千葉大学で研究した教員と教育学部卒業生とともに、鎌ヶ谷市の教育「学びあい・高めあう教育」の実践を日々進めている。

(文責 柳 昌孝)